02
岩手県
花巻市

特定非営利活動法人まんまるママいわて

「産前産後ケア」を被災地に限らずすべての母親に

震災時、緊急的に被災妊産婦受け入れ事業を立ち上げた発起人の一人、助産師の佐藤美代子さん。目の前の「お母さん」たちに寄り添い、走り続けた。その後、妊産婦の心身のケアは被災地に限らず必要であると思い至り、現在は花巻市などに「産前産後ケア」を行う拠点を運営する。

取組のPOINT

- ヒト　被災妊産婦を受け入れる
- 着眼点　被災妊産婦の不安に寄り添う
- 連携・協働　助成金獲得へ
- 持続性　行政の委託事業へ

DATA

- 取組主体　特定非営利活動法人まんまるママいわて
- 取組内容　妊産婦の産前産後ケア
- 人物紹介　代表理事 佐藤 美代子（さとう みよこ）

岩手県盛岡市出身。助産師。岩手県立衛生学院助産科卒業後、2001年岩手県医療局へ入局。2007年、花巻市で助産院開業。2011年、被災妊産婦受け入れ事業の発起人となる。同年、任意団体「いわて助産師による復興支援まんまる」を立ち上げる。2017年法人格を取得し現職。

ヒト　被災妊産婦を受け入れる

女性に自分の体を知ってほしい

佐藤美代子さんは盛岡市出身。看護学校での学びを経て「女性に自分の心と体を大切にしてほしい。そのためには正確な知識を伝えることが必要」との思いを強くした。専門知識を持って女性に寄り添える職業として選んだのは助産師だった。2001年岩手県医療局に就職し、最初の赴任地は県北部沿岸の久慈病院。３年勤めて結婚を機に花巻市へ移住、県立北上病院産婦人科で働き始める。そこで見たのは、１時間以上かけて病院に通院する産婦が、分娩に間に合うように陣痛発来前に陣痛誘発剤を使ったり、病院の統合によって産後のお母さんたちが満足なケアを受けられなかったりといった、地方医療の現実。育児技術を習得しないまま、山の奥へ戻っていく不安げなお母さんを見送るしかなく、もどかしさが募った。その頃、看護職の中で唯一開業できるのは助産師であると知り、地域で働く助産師として独立することを決心。東京での修行を経て2007年に花巻市で開業。産科過疎地域ならではの、産前産後のサポートをメインに活動。その間、07年に長男、10年に長女を出産した。

お母さんと赤ちゃんはどこへ帰る

東日本大震災が起きたときは3歳と0歳5カ月のわが子と自宅にいた佐藤さん。３日後に停電が解消すると、一気に沿岸

産前産後ケアを支えるスタッフ

温泉施設に被災妊産婦を受け入れた時の様子

部の津波に関する情報が押し寄せた。すぐに、助産師仲間や「いわて思春期研究会」という岩手県の思春期の保健にかかわる異業種グループと連絡を取った。聞けば、沿岸から妊婦が分娩のために盛岡市などへ続々と運ばれているが、分娩後の母子の行き先が体育館などの避難所しかないケースがあるという。地元花巻でできることは何だろうと考え、花巻市民活動ネットワーク協議会（はなネット）の会議に参加、被災妊産婦の窮状と支援の必要性を訴えた。協議会の決断と行動は早く、同会が事務局となって、温泉宿泊施設を活用して被災妊産婦とその家族を受け入れる事業を2011年４月にスタート。佐藤さんは岩手県助産師会中央地区支部の会員として事業に参加、他に花巻市の市民団体「お産と地域医療を考える会」が協力した。これが、佐藤さんの現在の活動の原点だ。

着眼点　被災妊産婦の不安に寄り添う

支援継続のため団体設立

被災妊産婦受け入れ事業は2011年４～８月に７組を受け入れた。温泉施設の個室に家族で入ってもらい、産前産後の不安に寄り添うことが目的。助産師が毎日通って赤ちゃんの体重を測り、相談に乗り、沐浴やケアを教えた。事業が終わる頃、佐藤さんは大きな組織で意思統一しながら動くことの難しさを感じるようになっていたという。目立ったことをすると仲間内から非難を受けることもあった。もう手を引きたいとも思ったが、しかし目の前のお母さんたちを見るとそうはいかなかった。「家を流されたり親戚をなくしたりしているのに泣き言一つ言わない。『ありがとう、もう大丈夫』っていうんです。そんなわけないじゃん！って思って」。そこで同年9月、「この仲間なら絶対やっていける、と思う人だけを集めて」、４人で任意団体「いわて助産師による復興支援まんまる」を旗揚げした。最初に取り組んだのは、花巻で受け入れた７組の母子が戻っていった先でサロンを開くことだった。

被災地へ通いサロンを開く

団体を立ち上げれば通帳を作ることができ、寄付や支援金を受けられた。大規模避難所では受け付けられない半端な数の支援物資も回ってきた。お茶とお菓子、おもちゃ、おにぎり、赤ちゃん用の体重計などを積み込んで、佐藤さんらは仮設住宅や「みなし仮設」のある街へ通った。「最初は参加者が4人とか、少ないんですよ。でも心配なまま送り出したお母さんに再会し元気な顔を見てホッとしました。また来るから次は友だちも連れておいでよ、って話して」。４ヵ所からスタートしたが、来てほしいといわれたり紹介されたり、行くべきだと考えたりして、訪問先はどんどん増えた。被災妊産婦受け入れ事業の際、実際には被災したのに制度の事情で支援できなかった母子の家にも、何度も通った。主に東京や岩手県の助産師会の援助を受けて活動費は工面でき、3年ほど続けた。

連携・協働　助成金獲得へ

組織づくりを学ぶ

震災から3年が経過すると、それまでのように支援金を受けられなくなった。民間企業からの寄付も、内陸に拠点を置く団体には積極的ではなくなった。いよいよ助成金や補助金の申請をしなければならない。そのためにはまず「しっかりした組織を作って運営し、社会的信用を得なければ」と佐藤さんは考えた。ところが助産師の集まりであるまんまるには、NPOの知識もスキルもない。紹介を受けて参加したのが、アメリカ発祥のメソッド「コミュニティ・オーガナイジング（CO）」のセミナーだ。熱心に勉強し、主催団体の伴走支援を受けて、まんまるは組織運営の形式を整えていく。そして、独立行政法人福祉医療機構（WAM）の助成金に応募、2014年に採用された。「これは本当に大きかった！」と佐藤さんは感慨深く振り返る。

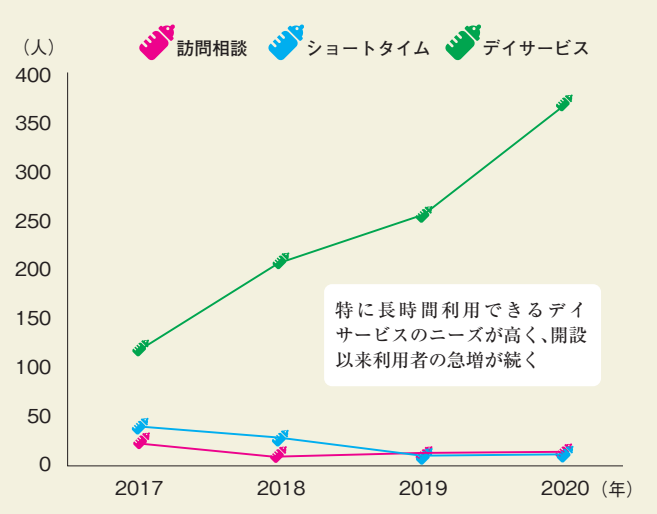
支援対象者をチームの一員に

COのワークショップの中で、佐藤さんにとって最も印象深い助言が「支援対象のお母さんを仲間に入れなさい」だった。専門家である自分たちは知識と経験からお母さんたちを支援して“あげる”のだと思っていた。「でも本当に必要なことは当事者であるお母さんにしか分からないでしょ、と言われて」と佐藤さん。「最初は半信半疑で」会員になってもらい、サロンのスタッフなど多様な役割を設定して関わってもらうようにした。すると彼女らは、ただの産後大変なお母さんではなかった。パソコンができる、経理経験がある、元教員だ、お菓子作りが得意だ…「私たちができないことをいっぱい持っていた、宝の山でした」。会員が増え活動の幅は大きく広がった。

釜石市の施設で行われたヨガの様子

利用者一人一人に向き合い、産後ケアを行う佐藤さん

■ 花巻市委託事業 産後ケア利用者の推移

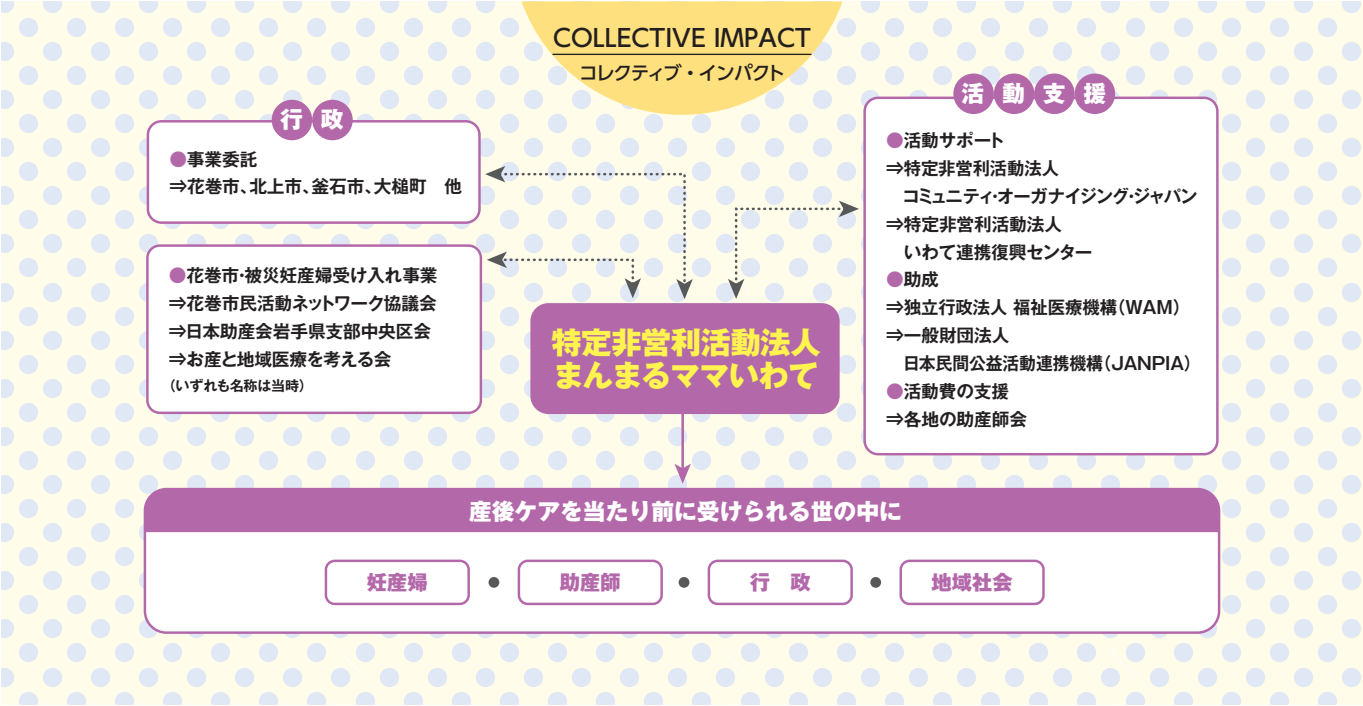


持続性　行政の委託事業へ

「産前産後ケア」の必要性を訴える

活動を続けるうち、妊産婦の心身のケアや育児のサポートを行う「産前産後ケア」は被災地に限らずすべての母親に必要だと感じるようになった佐藤さん。不安定な助成金頼みではなく、持続的に活動するために市から事業の委託を受けようと考えた。行政の担当者に直接話しても、従来「新生児訪問」を実施していると返されて終わりだ。しかし自分たちが行うのは、赤ちゃんの発育観察だけでなくもっと母親に寄り添った活動だという自負があった。

その必要性を伝えるために、市議会議員と子育て中の母親のグループミーティングを複数回実施したり、岩手県立大学と協働し、当事者の声を集める研究調査などを行った。エビデンスができたら、次は事例だ。2016年10月花巻市に「産前産後ケアハウス　まんまるぽっと」を設立、個室でデイケア等を受けられる事業をスタートした。ニーズと実績が揃い、17年４月、ついに花巻市はこれを委託事業とし、花巻市民は少額の負担でサービスを受けられるようになった。団体は同年12月に特定非営利活動法人まんまるママいわてとして法人格を取得した。



地元住人・団体の自立が理想

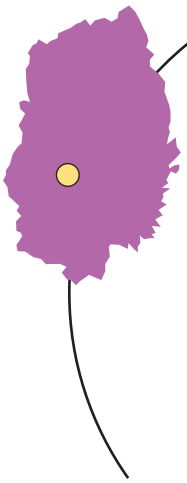
折しも「産後ケア事業」は国の施策として進められ、法律により全国の市区町村の努力義務と定められた。佐藤さんらの活動に対して周辺自治体の関心が高まり、18年度以降、花巻市のほか、釜石市、北上市、大槌町から、産後ケア・産前産後サポート事業の委託を受けている。

佐藤さんが重視するのは「地元住人が主体となること」。花巻からスタッフを引き連れていくのではなく、その街の実情やニーズを熟知する地元の助産師やお母さんスタッフが主体的に関わるよう、心を砕く。

「産後ケアを当たり前の文化にしたい。そのためにはそこで働く人の待遇の改善も必須です」。法人のビジョンは「すべての人が一人ひとりの生と性、こころとからだを大切に、いのちを喜び支えあえる社会」。今の活動はまだ通過点だ。

大槌町の「まんまるサロン」に集まった多くの利用者

産後ケアの沐浴を行う佐藤さん



本事業例の問合わせ先

特定非営利活動法人
まんまるママいわて

岩手県花巻市下幅21-36
E-mail：info@manmaru.org
HP：https://manmaru.org

岩手県内の妊産婦や乳幼児を持つ、母親・その家族・母子支援者等に対して、母子・家族支援に関する事業を実施。様々な角度から子育てをサポートしている。